小説 空蝉
原作 まくらカバーソフト
挿絵 桐島サトシ

魔剣士リネ

Leane of Evil Blade

二人の姫が孕みし刻

立ち読み版

登場人物紹介

Characters

ラメンティア

タリミア公国の姫君。最初はエリアスおよびフィオナの率いるライオネル王国と敵対していたが、レグナ帝国に対抗するため、今は協力している。見た目は幼いが、魔術師の才能は凄まじい。高飛車な性格で、エリアスに対してなかなか素直になれない。

フィオナ

ライオネル王国の姫君。いつも周囲に守られてばかりなのを気に病み、その生まれ持った魔法の才能を活かしてレグナ帝国との戦いに参戦する。いつも一生懸命だが、おとなしくて気が弱い健気な性格。

グレゴリー

レグナ帝国の将軍の一人。大柄で剣の腕が立ち、頭も切れる。今は帝国に従っているが……!?

ルクセイル

タリミア公国に突如現れた凄腕の魔導士。ラメンティアに従い、恐るべき魔法を駆使するが、謎が多い人物でもある。

エリアス

大陸支配を目論むレグナ帝国に対抗するライオネル王国の司令官。下級騎士の出身だったが、その能力を買われ、軍を率いることに。

プロローグ　007
第一章　萌芽　020
第二章　フィオナ　～尾を振る牝奴隷～　076
第三章　ラメンティア　～父に、民に、そして～　137
第四章　魔なる命が芽吹く時　192
エピローグ　245

プロローグ

血と鋼鉄の匂いが立ち込める戦場の只中にあって、その娘の紅い髪は殊更目を惹いた。

「来たれ！　紅蓮の炎よ――」

高位魔術の使い手たる彼女の、平素は勝気で高飛車な物言いに終始する淡い桜色の唇が朗々、詠唱を紡ぐ。

「と、唱え終わらせるな！　射殺せ！　とっとと叩っ斬れ！」

小隊長らしき立派な鎧を纏った大男が、泣きそうな顔で部下を怒鳴りつけている。その眼に宿る恐怖と、自己保身に終始する態度。いずれも遠視魔法で目の当たりにした少女魔導師が忌むものであり、彼女の怒りに火を注ぐ。

紅い髪と揃いのビキニ形状の衣服に包まれた肢体は細く、小柄で、実年齢以上に少女を[illegible]く映す。その小さな標的を埋め尽くしてなお余る大量の矢が射掛けられるも――。

「はっ！　効かないわよ、こんなものっ」

少女の身体に突き刺さるかと思われた直前にことごとく弾かれ、粉々に砕けて地に落ちる。ウィスプの障壁――光の精霊ウィスプが好む糸で編まれた装束を纏うおかげで、軽装ながら鉄壁の防御力を有する少女は、気兼ねなく攻撃に専念する事ができた。

「お婆さんのお古ってのが、ちょっとアレだけどね」

独り言ちた少女が纏うのは、かつて大陸中に名を馳せた大魔術師ベトリヌスが若い頃に愛用していた一着で、今や老齢となった彼女の研究所を訪ねた際、直々に譲り受けたもの。肌の露出した部分もウィスプが薄い皮膜のようになって護り抜いてくれる。

「い、嫌だ焼け死ぬなんて嫌だァァァ！」

戦の醍醐味は略奪と、強姦。そう下卑た顔で言い放ち憚らなかった連中が、今は皆一様に恐怖で顔を引き攣らせている。溢れる魔力の前に震え竦む脚では逃走も為せず、中には命乞いをする者もいた。

「あたしの国の民も。皆そう言ったはずよ。アンタ達は、それを聞いてどうした？　助けてあげた⁉」

紅蓮の魔術師――。

マント翻す少女の憤怒の形相を目の当たりにした敵の前衛兵共が、彼女の異名を呻くようにこぼして、やはり一様に目を見張った。もはや足掻く事すら忘れ、迫る死を自覚した諦めの眼差し。その全てが、赤々と空を染めた巨大火球を視界に収めていた。

「失礼な口を利いた事は許してあげる。その代わり……祖国タリミアを侵略した罪、その命で贖ってもらうわ！」

初めに少女の長手袋に覆われた手の内に生じた際には、文字通りの手の平サイズだった火球。それが、見る間に膨張し、今や天を衝き、青空一帯を紅蓮の色に染め抜く。

煌々と照りつける熱量は、鋼の鎧に身を包む敵兵共の肌を容赦なく焼く。侵略国家レグ

ナに向ける少女の憤怒そのものである焔が、怒髪天を衝くが如く伸び盛った直後に。
「インフェルノ!!」
紅蓮の魔術師――二十にも満たぬ若輩ながら異名轟かせる娘の唇が、代名詞たる極大炎熱魔法の名を諳(そらん)じる。同時に、かざしていた手が振り下ろされ――。
大地が軋み、砕ける響きの中で、無数の敵兵の阿鼻叫喚、断末魔の一切が掻き消える。魔法障壁を張り、約熱を遮る少女魔術師の目前で、相対した師団は骨も残さずに溶け散った。あとに残るは、焼け焦げ凹んだ大地と、肉の焦げた、こればかりは未だ慣れない、不快な匂いのみ。
「……ふん」
込み上げかけた吐き気を憎悪で押しとどめ、少女魔導師――ラメンティアが胸を張る。
(タリミアの兵は常に旗印であるあたしを見てる。一国を率いる姫として、最強の戦力でもあるあたしが、一刻でも情けない姿を見せるわけにはいかない)
父なき今は国家元首の立場も担っている。第一王女である姉が戦死した八年前から不甲斐なき父に代わって前線に立ち、兵を鼓舞するすべを身をもって学んでもきた。
戦場において華々しく先陣を切る「紅蓮の魔術師」の姿が、兵だけでなく、民草にも生きる希望を与えるのだと、知っていればこそ。あえての尊大な態度と圧倒的な火力を、紅蓮の魔術師は見せつけ続けるのだ。
(侵略戦争なんて始めたレグナ帝国。弱い者を踏みにじって笑ってる連中がいる限り、戦

い続けてやるんだから。そのために、あたしは魔法の才を持ち生まれてきたのよ）

今は帝国将軍の座にある姉の仇は、帝国領内の要所で任に就いているに違いない。彼の男との邂逅の可能性も、反帝国連合が勝ち進むほどに高まるのだ。

だからそれまでは、たとえ敵国兵からの憎悪を一身に受け止める羽目になっても、構わない。死への不安や恐れは常に付きまとったが、それを遥かに凌駕する自負と怒りが小ぶりな胸の内に渦巻き、復讐の火の糧ともなる。

一陣の風が吹き抜け、焦げ据えた匂いを遠く空の上へと運び去る。元の色を取り戻した空よりの贈り物――そよ風は心地よく、ラメンティアのささくれだった心根ごと、紅い髪を梳かしていった。

（……こうやってると、すぐまたアイツが来るわね）

だいぶ軽くなった胸の内を吐き出すように深呼吸をして、期待する。待ち人は必ず来る。確実な予感を抱いた胸には、すでに怒りではなく、年頃の少女らしいときめきが敷き詰められている。

彼はきっと、そばに来るなり『ない胸を張るもんじゃない』――口に出しこそしないものの、そう言いたくて堪らないのが容易に読み取れる、心配げな表情を振り向けてくるに違いないのだ。

「……総司令官が思考を易々読まれるなんて、褒められたもんじゃないわね」

金髪で優しい顔立ちをした青年騎士の姿を思い浮かべ、少女の口元に今日初めて、年相

応の無邪気な微笑が差し込んだ。
「ラメンティア！」
直後に、待ち人は予想した通りの表情で、馬を駆り参上した。ライオネル・タリミア連合軍総司令にして聖騎士団長。ライオネル王国摂政。武と政務双方に才能を発揮する、反帝国の要。
数多の呼び名を持つ若き騎士エリアスは、馬上から降りる事なく同盟国の姫を呼び捨て、続けて「また無茶をして」と、呆れと感嘆半々の表情で肩を竦めつつ語った。
「あたしを誰だと思ってるの。この位、何でもない。いつだって、こなしてきた事だもの」
紅蓮の魔術師なら、できて当然の仕事だ。部下を連れず単身で戦場を駆けるのは、極大魔法の炎熱に耐える障壁を張れる者が他にいないから。それに少数で多数の敵を潰せば、相手に与える心理的ダメージは甚大だ。いつだってそう考え、実際に成功させてきた。
「見くびらないでよね。子供扱いもしないで。……そんなに、年も離れてないんだから」
心配してくれて、ありがとう——本当はそう告げたかったのに、人目がある手前、虚勢を崩せなかった。
本当は今だって胸が高鳴りっ放し。明かせないでいる想いの丈の一端でも素直に伝えられたなら、どんなに楽だろうと思う。
だが、己の素直になれない性分を重々承知してもいる。彼の前では高飛車な態度に終始してきた少女には、今更どんな顔で、との躊躇いもあった。

立場も、性別も超えた友人関係。それが彼と自分の間の日常のやり取りになってしまっている以上、易々殻を破れるものではない。戦場で恐怖に押し潰された事のない娘が、恋焦がれる青年との関係が崩れる事については極度の恐れを抱いている。

「ラメンティア？　どうした、ぼうっとして。気を抜くな。ここは戦場だぞ」

いつ頃からか耳慣れた、男の声。若干低めの、けれどまだ年若さも感じさせる、この声のトーンが堪らなく好きだ。

抑えられぬ慕情に胸を締めつけられつつ、ラメンティアが声のした方へと顔を向ける。少女の瞳に宿る恋しさに気づく暇もなく隣を走り過ぎた馬上の騎士の、剣ダコのある手がすれ違いざま。ポンと紅蓮の魔術師の肩を叩き、囁いた。

「機を逃したくない。一気に詰めるぞ」

「言われなくったって、わかってるわよ」

――誰に言ってるつもり⁉　噛みつきたい気持ちもあったが、まだ喋り足りないのはお互い様。楽しみは、戦の後に取っておく。また暇を見計らい、部屋に呼びつけてやればいいのだ。他愛のない話に興じる、楽しい時を二人きりで過ごすために。

「エリアス！　姫であるこのあたしを置き去りにするなんて、許さないんだから！」

本当に伝えたい言葉は幾つもあったのに、飛び出たのは、またしても高飛車な台詞。

当たり前に受け流して、手だけ振った彼――白銀の鎧の背にマントはためかせるエリアスの駆る馬影が、瞬く間に遠ざかってゆく。じきに彼が直轄する五百の騎兵が合流し、す

でに総崩れの様相を呈す敵陣を鋭く貫く巨大な矢と化して。
「……後ろ。乗せてくれたって、いいじゃない」
相変わらず気が利かない。身内であるライオネルの武官達から親しみを込め「朴念仁」と称されるだけの事はある。視界から消えた想い人の名残を惜しむように、ラメンティアは誰にも聞こえぬ小声で、こぼしてみせた。
あるいは、今日すでに極大魔法を五発放ったこの身の疲弊を気遣ってくれたのだろうか。そう解釈した方が気分はいい。都合のよい解釈を選び取る事に決めた紅蓮の魔術師の瞳に、再びはち切れんばかりの生気が漲り出す。
「あたしはまだ全然余裕あるって所、見せつけてあげるんだから」
戦場に似つかわしくない溌剌とした声を響かせて、近くにやってきた兵の馬を借り、颯爽と跨ぐ。舞う土埃を翻したマントで払い除け、タリミアの姫が駆け抜ける。紅い髪と、同系色のビキニ衣装。紅蓮の魔術師の名と共に広く知れ渡る出で立ちの行く先を阻む者はなく。
「待ちなさいよっ、エリアス――――っ！」
遥か先を行く連合軍総司令を追う少女の表情は、希望と誇りに満ちて輝いていた。
「姫、お疲れではありませんか？」
「だ、大丈夫です、エリアス様」

強がる言葉と裏腹に、華奢な腰から下が頼りなくふらつく。少し駆けただけで息が上がり、動きやすいように誂えた純白ドレスの胸元が忙しなく上下していた。
王宮暮らしの身体の頼りなさ。王族である自分だけ安全な場所に隠れている事を厭い、戦う望みを告げた時以来、己の不甲斐なさを思わぬ日はない。
澄んだ空と同じ色の長い髪を後頭部でひとまとめに結わえた娘――エリアスに姫と呼ばれた少女は額に浮く汗を拭い、疲労の滲む顔を前に向けた。
「聖騎士団。フィオナ姫を必ずお守りするぞ！」
白銀の鎧に身を包むエリアスの激励に応えて、地鳴りの如き威勢の声が師団のそこかしこで上がる。ラメンティアと同様に光の精霊ウィスプの加護を得た衣装を纏うフィオナに危害が及ぶ可能性は限りなく低い。それでも「守る」と告げた時のエリアスの横顔が眩く思え、しばらくの間、姫は自国ライオネルの誉れである青年騎士に見惚れた。
（わたくしも、もっとエリアス様のお役に立ちたい。守られているだけの女で、ありたくない）
エリアスを理想主義と揶揄する者も稀にいるが、曲がった事を決してよしとせぬ高潔な彼の姿勢はより多くの者を魅了する。武官にありがちな粗暴さを微塵も持ちあわせず、書物を読むのが好きだと穏やかな笑みを浮かべていた彼。エリアスは臆病な箱入り姫にとって、親しみと信頼を共存できる稀有な存在だった。
（首都陥落の折に政務官の大半を失った我が国を立て直すため、どうか、無力なこのわた

くしを支えて欲しい。そう、お願いした時も、少し困った顔をした後に快く引き受けてくださった……エリアス様）

結果、若くして連合軍総司令と摂政の重責二つを担わせる事にもなってしまった。寝食の時を削って働く彼の姿を見るにつけ、そのいずれか片方でも代わりに背負える力があれば、と悔しく思う。

いずれは嫁ぐ姫だからと、武術はもちろん、政務についても学ばせてもらえなかった事。侵略される前には「そういうものか」と納得できていた事を、今になって後悔している。

（もっとわたくしが努力していれば。エリアス様一人に背負わせる事もなかった）

始めは、そうした自責の念から見つめていた彼に、違う想いを向けるようになったのはいつからだったか。

反帝国レジスタンス組織と会談を持つ際、常に傍らに付き添ってくれた彼の手を、心細さから密かに握った時。反帝国の旗頭として大勢の者の前で宣言する事の重みを、「共に分かつ」と言ってくれた時。

思い当たる事は無数にあり、今となってはどれと断定するのは難しい。

いずれにせよ、常に勝利と温かな気持ちをもたらしてくれる騎士が、初恋も知らずにいた箱入り姫の心に居つくのは自然の流れだったのだ。

「わたくし、もう一度、参ります」

「ですが、姫」

心配性の青年に困った顔をさせるのは本意ではない。けれど一方で、眉根を八の字にした彼の表情を可愛らしく思い、胸ときめいてしまっている。
国のためというのも無論あるが、その国を救うために身を粉にしている彼に報いたいとの想いが今は、疲弊していた心身を奮い立たせる最大の原動力となった。
「エリアス様。わたくしに、やらせてください」
再度告げた主君の目をじっと見て、覚悟の程を汲み取った彼が頷く。
「お傍にて、お支えいたします」
その短い言葉に滲む優しさ。凛々しい横顔。剣ダコのある、温かい手。青年騎士から多くの励みをもらって、再度。前を、総崩れの敵陣を青い眼が見据えた。
かざした手の平に凝縮する白熱を感じ取る一方で、それとは異なる火照りを、エリアスが支えてくれる背に感じる。
「――ホーリー！」
聖なる文言を唱え終えたフィオナの手が、白い閃光を撃ち放つ。放出後に術者の身の丈を優に超えるサイズに膨張した聖なる閃きは、何者よりも速く戦場を一直線に突っ切り、数多の敵兵を輝きの中へと呑んでいった。
「……っ、は、はぁっ、はっ。あ……っ」
「フィオナ様っ」
これで今日、八発目の極大呪文。限界まで魔法力を駆使した代価として噴出した苛烈な

脱力感に呑まれたフィオナの身体が、膝から崩れ落ちる。
慌てたエリアスの腕に抱き寄せられた瞬間。フィオナは荒く乱れた呼気を整えるのも忘れ、至福に浸った。
「すぐに横になれる場所へお連れいたします。しばしのご辛抱を」
「はぁ、はっ、は……いえ。いいえ……この、ままで……」
彼に触れている部位が熱を孕んでいる。冷静に考えれば鎧越しの彼に伝わるわけもないのに、慕情に憑かれた胸の内に気恥ずかしさが渦巻いた。
羞恥と昂揚はいずれも漏れなく伝わって、朴訥な想い人の頬を赤らめさせる。凛々しい彼の様は愛しさを募らせるが、照れた顔も可愛らしくて堪らない。
戦場に不似合いな感情を胸に抱いてしまっている事に先に気づいたのは、白銀の鎧に身を包む騎士の側だった。彼は自らの手の内にあった温みと柔らかな心地を惜しむように一度強く抱いた後、手配した馬車の寝台に恭しく横たえた。
「すみ……ません……まだ、戦は続いている……のに」
「いえ。姫のおかげで我が軍は勝利を手繰り寄せる事ができました」
少しでも彼の助けになれたのなら、嬉しい。必要とされている実感を得たおかげで疲弊も幾分和らいだ気がして、ようやくフィオナは艶やかな空色の髪を寝台に落ち着けた。
その様子を見て安堵した若き聖騎士が口元を一瞬緩め——すぐに、部下からの報告を受けて表情を引き締めた。

「タリミアのラメンティア姫が前線に到着。敵陣はもはや戦線維持もままなりません！」
「よし、我らも打って出る。一気に大将首を挙げるぞ！」
フィオナの手をそっと握り、「行ってまいります」と短く告げたエリアスが、味方に鬨の声を上げさせながら、敵陣深く切り込んでゆく。
「どうか、どうか……ご無事で……」
未だ手に残る彼の温みを握り締め、フィオナは想い人の無事の帰還を強く祈った。

胸当てと同じ髪色の姫の名を呼べば、待ってましたとばかりに、少女の上体が大きく映り込む。

――ヂュッ、ヂュウウッ！

「痛っ、ぁぁ……あ、後で覚えてなさいよっ」

腋下を擦り嬲ったかと思えばさらに上昇し、紅い胸当てを行き過ぎて、左右それぞれの乳の上弦へと、蛇の頭がかぶりつく。かぶりつくなり左右の乳肉を同時に強く吸引され、ラメンティアの表情が歪んだ。

苦痛を堪えつつも、睨みを利かせる事を忘れないライトグリーンの瞳。そこにはまだ平素の彼女らしい強気が宿っていて、傍観する以外にないエリアスの胸に幾ばくかの安堵が染む。

――が、それもほんの一瞬に過ぎなかった。

「いぁッッ⁉　あ……！　や、めっ……ひぃっ、いィィンンッ」

痛みを覚えて強気に返していた少女の表情が一変する。乳肌に吸着するスライムの甘噛みによって痛みを緩和され、元より敏感な彼女の肉体が仰け反り、繰り返し跳ねる。股間を摩擦され続け、快楽により弱く仕立て上げられてしまっていた分だけ、過剰な身悶えを披露するラメンティア。

強気が宿っていたその瞳に浮いた悔し涙が、ギュッと瞑った拍子にこぼれ、頬を伝い落ちていった。

「こ、こんなのっ、痛いだけっ、それだけなんだから……あっ⁉　ひ！　あぁ、んっ！　やっ、あぁぁあぁっ」

下準備の整ってしまっている肉体の感応が、抵抗心を押し潰す。虚勢は一分と持たず、スライム蛇のもたらすぬめついた愛撫に押し負ける。

涙声と、震え瞬く眼差し。常の彼女にない表情を見せつけられ、エリアスの焦燥と嘆きは最高潮に達した。

「……ッ！」

彼女達は見られている事に気づいていない。痴態を覗き観る心苦しさに耐えられず、再度エリアスは目線を外した。

（駄目だ……っ！）

よっぽど投げ捨ててやろうかと思い振り上げた拳の内の水晶を、改めて見つめ、姿勢を正す。深呼吸をして出来得る限りの平静を繕って、再び視線を凝らす。

（まだ、何も手がかりを掴んでいないんだ。実際に嬲られている彼女達より先に、オレが音を上げてどうする！）

胸に巣食う焦燥が吐き気を誘引し、えずきが止まらない。全身ベットリ汗が浮いているのに、寒気が止まらない。そんな状態であっても、一つずつエリアスは事態の把握に努めていった。

この仕掛けの主導者は、十中八九ルクセイル。策謀と人知を超えた術を用いて姫二人を

攫った当事者である事を思えば、彼女らの現況を知らせる水晶を残したのも奴、あるいは奴の手の者と考えるのが妥当だ。
姫達の痴態を見せつける意図は先に推察した通り。
（水晶を部屋に持ち帰った所で放映が始まったのは、不幸中の幸いだった……）
今後も気をつければ、他の将校や民の目に触れさせずに済むはずだ。
「いひゃ、っあぁぁうう！　やぁっ、あ！　た、すけてっ……エリアスぅぅぅっ」
思案を中断して意識を水晶玉に戻せば、M字に開いた股の付け根へ、丸太のように厚く肥えたゲル状の柱が突き立とうとしている。その禍々しく歪に凹凸を備えた突端に小突かれるたび。すでに湿っているフィオナの唇が震えて滑り、奥よりの甘い蕩け声を響かせる。
「フィオナ様っ……！　やめ、ろ……やめてくれぇぇっ！」
そんな太いもので貫かれたら、彼女の身体が壊れてしまう――！
未だ姿見せず、声一つ発さぬ撮影者。首謀者でもあるだろう「氷の死神」に向けて嘆願する。声が届かぬとわかっていてもなお、叫ばずにいられなかった。
――グヂュッ……。
「ひあ！　ア……あァ……ンッ！」
無情にも圧を強めるゲル肉棒を見つめるフィオナの瞳がギュッと瞑られ、涙の筋が左右の頬に伝う。
「そん、な……嘘、だ……っ」

信じられない。そうエリアスに思わせたのは、姫が諦め、受け容れる覚悟を決めたように見えたからではない。

喘ぐ少女の瞳は涙に濡れていた。先ほどまでは、悔しげに食い締める事もあった彼女の唇は、もはや開きっ放し。はしたなく垂れ出た舌先にさらによだれが垂れ下がり、覗く喉奥も嬌声を吐き出すたび震え悶えている。

それらが、どうしても悦んでいるように見えてならなかったから。

「違う！　ライオネルの姫はっ……フィオナ様はそんな女じゃない！」

憑かれたように幾度頭を振ろうとも、一度住みついてしまった負の印象は執拗にこびりつき、剥がれてくれない。

「ククク。もうあと、幾日。何度持つかな。貴様らの蜜を吸い肥え太ったスライムが、美味そうに光の精霊を食んでおるわ」

「ルクセイル……っ!!」

首謀者たる男の声音は、誘拐現場で聞いたのと同じ。否、あの時以上に嬉々と弾み、事態を心底楽しんでいるのが読み取れた。

その言から、今まさに姫二人の身を弄ぶスライムによって魔法障壁が弱体化させられている事も、すでに障壁消滅のカウントダウンが始まっている事も知れる。

「んぁっ！　うぅ、もっ、お、やだぁぁっ！」

蜘蛛の巣に囚われた蝶が如く。為すすべなく攻めを受け容れたラメンティアの全身が、

小刻みに、延々と痙攣を繰り返す。八つ股の蛇と化したスライムにしゃぶりつかれた股座から、匂い立つような小便の湯気が薫る。

——ぷぢゃっ！　ぶぢゅっぢゅぶぐぢゅぅっ！

漏れ出す端から撹拌され、泡立つ潤滑油と化して八つ股の蠢動を助勢する、尿液。それを恨めしげに、羞恥に呻くライトグリーンの瞳が睨みつけていた。

次いで、水晶の画面に大写しとなったラメンティアの秘部。縦スジ一本の幼い割れ目は、啜られ過ぎて赤く腫れつつも、八つ股の吸引に合わせてヒクつく。その接着面から、黄色い尿液でも、緑のスライムの粘性体液でもない半透明の液体が染み出ているのを、エリアスの眼は見逃さなかった。

見逃せなかった、というのがより実情に近かったかもしれない。

あの強気なラメンティアが。女らしさをほとんど感じさせなかった、少女が。中々気難しい反面、屈託なく笑う姿が可愛らしかった、彼女が、あられもない嬌態を見せつけている。

抵抗を許されぬ状態で手折られゆく供物。その儚さが背徳的な感応となって、見る者をより一層惹きつける。

彼女の名誉のためにもこれ以上先を見てはいけない。いくらそう思っても、目が離せなかった。

「ひやっあ！　ひっ！　ま、たぁぁっ！　またきちゃっ、あぁうぅっ」

煩悶する青年の心根をさらに惑わす恋人の嬌声が、駄目押しとなり。
「……ッ、フィオナ……！　駄目……だ、頼む……耐えてくれ……でないとっ」
魔法障壁が消滅すれば、その先に何が待つか。異形を放って女囚を嬲るような輩の考えを読めてしまう事が、この時ばかりは情けなく、悔しく感じた。
――ビュブッ！　ブヂュゥッ！　ブシュッ、グヂュブヂュヂュゥッ！
「はゥッ！　んひ……ィィッ、いひやぁぁっ！」
絶頂に咽んで派手に漏らした蜜汁が、肉厚の緑の柱によって再度膣内へと押し込まれる。抜き差しのたび緑の肉棒に吸いついた姫の膣粘膜が捲れて覗く。充血したその様が、異形のピストンに合わせてブポボポ響く蜜の撹拌音と一緒になって、彼女の興奮度合いをエリアスに突きつけてやまない。
荒ぶる呼吸を整える事に気を回す余力すらなくすほど。エリアスの意識は水晶の中の光景に釘付けとなった。
「……ッ、オレが、信じてやらなきゃ……」
薄くも厚くも、長くも短くも自在に形を変えるスライムのもたらす刺激は、人のそれと決定的に違うだろうから。彼女達が翻弄されるのも仕方がない事。刺激に身体が感応するのも、生物として当たり前の事。ただ、それだけの事――。
（その中でフィオナ様も、ラメンティアも必死に頑張ってる。耐えているんだ……！）
二人の姫の抵抗を信じる男の精神を切り刻むが如く。

「ひぐッッ‼　おしっこ、またっ出ちゃうぅぅぅぅっ！」
紅い髪を乱す少女の腹部が波打ち、悲嘆と恍惚の絶叫を振り絞る。
「ひひゃっ、あああ……エリっ、ア……あくぅッンンンぅぅぅぅっ！」
想い人の名を最後まで呼びきる事もならずに、空色のポニーテールを振った少女の股座が盛大に蜜を噴き漏らし、痙攣した。
ぢょぼぢょぼと注がれるラメンティアの尿液と、二本脚の痙攣に合わせ飛散するフィオナの蜜汁。どちらも貪欲に啜った緑のゲル状生物が、より肥えて二つの女芯を舐り擦る。
そうして延々、終わりのない嬌声が迸る。
「やめろ……もう、やめてくれ……」
呟きながらも目が離せない。水晶越しの二人の姫の視線はあらぬ方向を向いたまま、虚ろに瞬くばかりで、当たり前だが見つめ返してくれない。
心刻まれた青年騎士の眼は虚ろに陰っていたが――。
（二人を助けるための、手がかりを……何か。小さな事でもいい……）
血走った視界に映る二つの痴態と、その背後の景色とを網膜に焼きつける。
その内に点る希望は未だ、儚く揺らぎつつも潰えてはいなかった。

「いひゃっ、あ、言わないれぇっ、わたくしはそんな、あっあひィィンッ！」
枕の上に水晶を置き、空いた左手でグレゴリーが勃起乳首を摘まんだ。
喘ぎ仰け反った拍子に尻を覆い直そうとしたスカートを、力任せにグレゴリーの右手が裂き千切り。
恋人の悲鳴を聞き持ち上がったエリアスの視線と、反動で項垂れたフィオナの視線。二つともが、同じ部位――男女の結合部を捉え、凝視した。
千切り終えた裾を投げ捨てたグレゴリーの右手が再び右の乳房に被さって力強く揉みしだく。それと同時に彼の腰が強く突き上げられ、
「はひっ！　いひぃぃっ!!」
長大な逸物を咥え込む牝腰が前方に迫り出し、より間近でエリアスに不貞の結合部を見せつけた。
追って突き刺さる肉凶器を易々受け容れて、咽び波打つ下腹。汗とは違う、甘酸っぱい汁気にまみれた恥丘では、濡れそぼった薄めの恥毛が方々乱れて張りついている。ベッドシーツとの境界にわずかに覗く結合部で、抜き差しのたび垣間見える蜜まみれの陰茎を射抜かんばかりに凝視して、屈辱にわなないたエリアス。
「うう……ぁひィィッ！　いひゃぁぁっ、はひ、いぃぃっ、やらっあぁぁぁ！」
グレゴリーの言葉通りに突きを浴びた分だけ淫らに、自ら進んで左右にくねり舞う様を見咎めてしまった以上。フィオナは何一つ、エリアスにかける言葉を見つけられなかった。

代わりに、また雄々しい一撃を見舞われた陰唇がきつく狭まって侵略者を歓待する様を見せつけて、甘い嬌声ばかり吐き連ねる。

男女の性器がぶつかった勢いで弾け散った蜜液が正面の、枕に鎮座する水晶に付着して、映る青年の顔を滲ませた。その申し訳なさを覚える間すら与えられず。突き抜けた恍惚の痺れが、我慢に我慢を重ねた女体を易々打ち崩してゆく。

結合部に溢れる蜜はグチュグチュと盛大に鳴り響き、視界を遮られてなおエリアスの心を抉り続ける。

「ひやっぁぁっ、見ないで、見ないでエリアス様ぁぁーっ」

エリアスの視線を意識するほど過敏になり、尾の震えも、膣襞の蠢きも際限なく増してゆく。

「実情を認めた所で、俺の子種も受け容れていただこう」

わざと畏まったグレゴリーの通達を受けた瞬間。

「いひゃっぁぁぁぁぁ……!?」

嫌あっ――！　そう吠えたはずの唇が、唾液で滑って開くや、果てしなく蕩けた嘶きを響かせた。

期待に潤んだ肛門が締まりを緩め、再び目一杯に連結コブが突き潜り。複雑な回転に揺らぎ抉れた腸壁がトロトロにぬかるんで、またコブにギュッと――隙間を詰めて抱きつく。

（エリアス様の見ている前で、中に注がれたく、ない……！　これ以上彼を傷つけたくな

い。嫌われたく、ないの……っ！）

無駄を悟りつつも孕んだ拒絶感情は、グレゴリーの逞しいピストンに片っ端から撃ち落とされ、子宮の発する悦波に攫われる。

もう、とっくに我慢の限界を迎えていたから――だから――。代わりに連ねた諦めの意識が、最後の念押しとなり。歯止めを失くした女の腰と、陵辱者であったはずの男の腰。ぶつかりあう二つのリズムが寸分違わず重なった。

――ぢゅぼぉぉっ……ぱぢゅんっ！　ぱぢゅっ、ぢゅぼっ、ぱぢゅ、ぼぢゅうっ！

「ひぃっ、ぐ！　あひぃぃ。ぃっ、奥っ、凄ひっ、のぉぉぉっ」

「中で脈打っているのがわかるな？」

膣の入り口から子宮口まで占拠する男根が、猛々しく咆哮しては、張りつく襞肉を揺すり剥がす。それでもなおすがりついた襞の一枚一枚を擦り捲って痺れさせ、より従順に躾け直してゆく。

「赤ちゃっ、んっ！　やひゃぁぁ！　孕みっィヒィあァァァ！」

孕みたくない、エリアス以外との赤ちゃんなんて――そう紡ぎたかったのに。

「ああわかっているとも。孕むまで、これから毎朝毎晩抱いてやる。必ず、種付けの瞬間をエリアスに見せつけてやろうなぁ、フィオナ！」

ドスドスと無遠慮に、かつ巧みなリズムで牝尻を突き捉える男根が、誤解を助長する嬌声ばかり漏らさせる。ピストンのたび、雁首の段差が膣壁を容赦なく削って、呼応した襞

肉がひと際肉幹に吸着し。
「ふぁっ！　う！　あひっ！　んぅぅっはあっ、あァァァァ……ッッ！」
度々頭の中で白熱が散り、意識が寸断させられる。
グレゴリーがピストンのリズムを一段上げれば、乗せられて尻を振り、尾を振って、腸内で転げるコブの不規則な動きにも酔わされた。
「ひぐっ……うぅぅ！　もっ、ぉ、わたくひっ！」
エリアス様、ごめんなさい。はしたないわたくしを許して――。連ねる謝罪が被虐の悦を孕んで舞い戻り、極太亀頭に突き上げられた子宮の疼きと共に胎内に駆け巡る。
――ブポッ！　ボヂュ！　ブボボッ！
空気を含んだ尻穴が放屁に似た撹拌音を奏でるたび。恥悦に浸かり波打つ牝尻が望んで間男の腹に摺りついて、内なるペニスの脈動を誘う。
激しく出入りする肉棒と肉唇の間から掻き出された泡立ちの蜜汁が再度水晶に吹き散って、トロトロと鏡面に滴る液の向こうにエリアスの姿が隠れてしまった。
その事にどこかホッとしている自分に気づいた矢先に。
「んひっ、いいいいっ！」
――ずぶうううっ！
波打つ牝尻が、連結コブを自ずから深々と咥え込む。腸内に奔る甘美の痺れを薄壁越しに受け取って引き攣る膣肉が、奥へ奥へとエラ張りの亀頭を招き入れ、歓迎の意を示す真

新しい蜜を噴きつけた。
「必ず、孕ませてやる。必ずだ！」
最奥に到達するなり雄々しく吠えた肉棒の切っ先が、子宮口をこれまで以上に強く穿つ。
――ビグンッ！
雁が鉤状に変化して、無理矢理に子宮口をこじ開けてゆく――。
「ひぎゃっ……あァァッひィィィィィ……ッ⁉」
それは、極限状態の女体が起こした錯覚。あるいは、自ずから受精器官の口を開いて他人汁を受け容れる事実を否定するために姫の心が作り出した願望の賜物だったのか――。
いずれにしろ、亀頭が子宮口を貫いて内へと食い入った。その未知なる衝撃の前に、押し潰されるフィオナの双臀は粘つく汗を噴き、嘶くように痙攣した。小刻みな尾の揺らぎに腹部をくすぐられたグレゴリーが、むずつきをはね除け、さらに腰を押し進め。
――グリュゥッ……ぼごんっ！
尻にコブがねじ入った時とは比べ物にならない、瞬間的に意識を断つほどの激烈な振動が子宮内に突き抜ける。抉り破られた子宮の口が痙攣し、食い入った肉槍の雁首を連続で締め上げた。
脈打ちながら膨張する肉幹を、みっちりとすがりつく膣壁が感じ取り。
「ひひゃぁっ⁉　ひゃめっ……奥でっ、らひひゃあああっ！」
再増殖した妊娠への恐怖と同時に、電撃のように鋭い肉衝動が四肢末端にまで行き渡る。

肉欲に憑かれた尻谷と肛門がギュッと窄まって内なるコブを一斉に締めつけた。同調した膣壁も、襞を総動員して肉幹を掃き愛でる。

「望み通り奥に注いでやるっ……！」

――ぐぶぢゅうううっ！

「ひぎ、っんあああああああああっ‼」

子宮内にねじ入った肉凶器の切っ先が白濁の雪崩をぶちまけた瞬間。

――ど、びゅうううぅっ！

汁濡れた水晶の鏡面に曇って映る人影が、絶望を訴え咆哮していた。その絶叫と、膣内で脈動する牡肉の雄叫びを、照らしあわせながら。

「ひぎっ、いィィィッ、イグッ、いぎゅっ、うぅぅぅぅぅう～～～ッッ‼」

頤を逸らせた女の、悲哀と、眩むほどの愉悦にまみれた涙声が迸る。

――びゅぐっぼびゅうううっ！

「ハハッ、絞りおるわ！　いいぞ、ありったけ注ぎ込んでやるっ！」

嘆きのリズムに乗じて、熱々に灼けた白濁汁が子宮内部に注ぎ込まれる。子を孕む器官を見る間に占拠する大量の種汁。エリアスのそれとは比類にならぬその勢いに揺さぶられて、火傷したようにひりついていた内粘膜が恍惚に蕩け蠕動した。

「くひっ、イィィィッ！　ひゃひっ、まら、ぁっ、ひぐぅぅぅぅっ！」

胎内を内から火照らせる種汁の熱量が、絶頂の高みに押し上げられるたび淫熱を溜め込

む女体に馴染んでゆく。
（お腹の中でたぽたぽ波打って、まだドク、ドクって注がれて……わたくしの中、汚されて……っ、なのに、あぁ、なのにぃぃっ）
妊娠への恐怖も、恋人の視線も相変わらず胸中にひしめいているのに、遥かに凌駕する肉欲に呑まれ、貪る事をやめられない。
「熱、いひぃぃぃっ、ひゃらっ、あぁァァぁ！　ヒィッぃぃィッっくふぅぅぅぅっ!!」
三度、四度、五度。エリアスと比べると倍以上長い射精時間に繰り返し絶頂に上り詰め、一度に撃ち出される量も桁違いに多い種汁の全てを子宮と、膣洞に余さず受け容れて。そのたび収縮した産道で牡肉が鼓動する。
「ひぐっ、っふぅぅぅぅっ、っ！」
六度目。枯れて掠れた声音を絞り出しつつ果てた汗だくの肢体を、なおグレゴリーの逞しい腕が抱き締めて離さない。
「反帝国連合総司令――エリアスよ、見ているな？　コレは、もう私のものとなった。……いつでも好きな時にその水晶を覗くがいい。存分に元恋人の痴態でマスをかけ」
勝利宣言をした男の手が、ヒクつく尾を掴み引き上げた。
「ひあああぁっぅっ！」
必然的に持ち上がった牝尻が、これまでと違う角度で肉の棒に貫き通される。一撃見舞われただけで、躾けられた子宮が咽び哭き、七度目の極上悦楽を味わった。

「くひひ！　髪に擦りつけられてアへってやがる……！　いいぞォ、そのままベロ出して待ってろ！」

後れ毛をベトベトに濡らしてなお余りある異形の体液が、首を伝って後頭部、前髪へと行き渡り。堕姫が恍惚に喘ぐタイミングでボトボトと地上に降り注ぐ。頬へと移り舐りついた長舌のチロチロと細やかな動きに炙られて、ひと際震え喘いだ童顔。その火照り赤らむうなじから、垂れ流れた異形の唾液が頬へ、鼻筋伝い額にも行き渡る。

「す、は……っ、はひィィ♥　臭く、なっひゃぁぅぅ♥」

エリアスに愛でられた想い出ごと穢れゆく実感が、自虐の悦を誘い込み、膣と腸、口内に大量の汁気が溢れ出す。

「ぐ、ずっ……はひっ、あ……ぁぁ、くふ、ぅぅんんっ！　ひ、っぐ……！」

――ぶぽんっ！　ばぢゅっ！　ぶぽぼっ！　ぶぢゅっ！　ぬぼばぢゅんっ！

嘆きと恥悦。互いに相乗作用する感情が、股間の両穴に突き刺さる男根の糧となり、ピストン速度をさらに一段、跳ね上げさせた。

「ひぐふっうぁ、あひィンンッ！　壊れひゃっ、ぁぐっ、んっひィィィィ♥」

股間の二本に気を取られれば、別の二本が動き速め、存在感を主張する。

胴にきつく巻きつくアーリマンペニスが己の体液を絞ってはズリズリ、摺りつけた。腋に伝ったその湿り気が、汗と熱に溶けてニチャニチャ、糸を引く。へそ穴に溜まった分が牝腰の律動に伴い腹肉ごと波打って、極太男根を食む女陰にまで垂れ落ちる。

「へひひっ、泣いてしゃくり上げるのに合わせて震えてらァァ。そぉ、らよっ！」
女体の淫熱に温められ粘りの増した、たっぷりの体液と共に、グリグリと乳首擦る肉幹。ますますきつく巻きついて乳丘全体を捏ね潰す、その突端が、ぱっくり開いて喜悦の先走り汁を噴きつけた。
「んひゃぁぅぅっ！」
直撃した堕姫の右乳頭が弾み、浴びた悦を吐き出すよりも先に再度捏ね潰され、より鬱屈とした熱と疼きを刻まれる。
「ひ、左の乳首にもぉ……今のっ、して、ぴゅっぴゅ、してぇぇ♥」
媚びるほど股と胸の奥底に、被虐悦が堆積する。それを食らった四つの肉凶器が、各々の居場所でひと際跳ねて、突端の口から先走りを噴きつけた。
「ひっぐ、うぅ、ぐす、っ、はヒィッ！　うごっ……！　おひ……ィィィッ、破けちゃ、あが、っ！　ンォッ、おひっぃィィィぐぅぅぅッッ！」
急速に増した汁気に滑り、膣壁を抉った男根の突端形状が、細身の少女の腹部にぽっこりと浮かぶ。
常人が与えられれば絶命しかねない暴虐を浴びてなお、肉悦に蕩けた牝腰が喜悦噛み締めて踊るのをやめられないでいた。
えくぼ浮かべギュッと締めつけた尻たぶを揺すり立て、ズルズルと抜け出てきたアーリマンの長大ペニスが、再度。すがり引き攣る肛門ごと一気に突き潜る。

――ゴッ……ぶぢゅうううううっ！

襞亀頭の愛撫に堕とされた子宮がとうとう口を開け、間髪入れずに悪魔ペニスが突き刺さった。衝撃に緊縮し、猛烈な圧迫感と、支配される悦びにまみれた子宮が、襞亀頭を限界まで食い締め、湿り帯びた口で甘噛みするように揉み潰す。

「おおおォォォォらァァァァァッ！」

「来てっ、ぇぇぇぇ！」

ブグッと膨張する男性器の予兆を、食い締める事で最大限に感じ取り、喜悦にまみれた懇願を躊躇なく吐きつけた。

――ぼびゅっどぼぼびりゅるるる！

「へぁ♥　あぁぁひっ♥　ひぐっ！　あらひっ、イッッぎゅうううぅぅ〜〜〜〜〜〜!!」

子宮内に雪崩れ込む白濁液の、熱、粘り、勢い、質量。実父のそれと桁違いの異形の射精を初めて受け止めた子袋が、見る見る満杯にされてゆく。

女の一番大事な場所を穢され、支配される。堕ちる所まで堕ちた実感が、子宮内の粘性種汁がボチャボチャ波打つたび、痛切に染む。視界が真白に染まり、痙攣した足首が無自覚なまま悪魔の腰に抱きついて、一層の密着と刺激を自ずから貪った挙句。

――びゅぐっ！　びるるっ！　びしゃっびゅぐびゅるびぢゃぁぁっ！

やや遅れて腸内に、ドロドロの熱液が噴き注ぎ。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

あなたのキモチイイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

電子書籍も配信中!

業界唯一!エロラノベ&エロコミック満載!!

二次元ドリームマガジン

2D DREAM MAGAZINE

魔法、催眠、性転換…不思議Hコミック誌!

大人気PCゲームのコミック多数連載!

コミック UNREAL アンリアル

ヒロインピンチDX

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて! キルタイム 検索 Click

書店、ダウンロードサイトなどで好評発売中!

※いずれも18歳未満の方は購入できません。